

花登筐

氷山のどろどろ

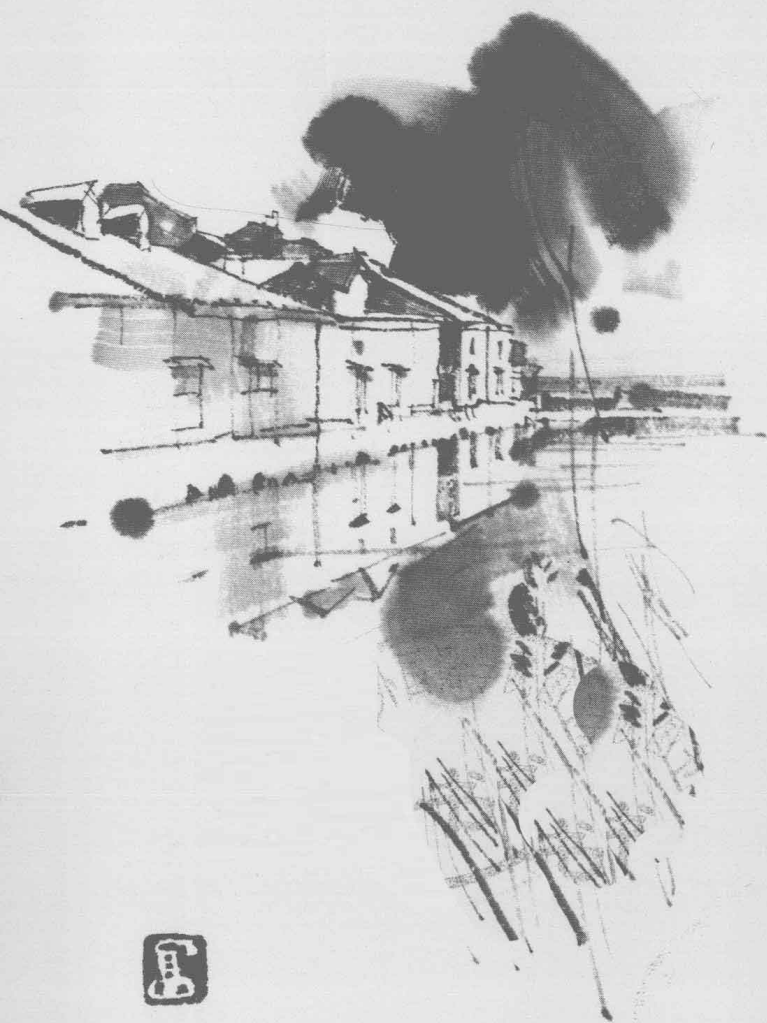
①

「小僧北来」篇



氷山のゴトク ①

「小僧北来」篇



氷山のごとく① 「小僧北来」篇

昭和五十五年十月二十日 第一刷発行
昭和五十五年十二月十五日 第三刷発行

著者 花登 筐

発行者 真野 義人

発行所 東京新聞出版局

電話

東京都港区港南二ノ三ノ一三
中日新聞東京本社
振替口座(東京)五一五四九七
〇三四七一・二二二一(代表)
〇三四七二・四四三四(直通)

印刷・製本 大日本印刷株式会社

ISBN4-8083-0031-1

©1980 KOBAKO HANATO

ISBN4-8083-0032-X

C0393 ¥0870E

氷山のごとく①

「小僧北来」篇 ■ 目次

「どう……あい」

三日 小僧

別格官幣番頭

ご隠居さま

装画・さし絵／成瀬数富

氷山のごとく①

「小僧北来」篇

「どう……あい」

乾いた路上に砂塵が舞った。

それだけでなくとも十五間幅の広い路上に、往来する牛馬車や荷車がたてる砂埃の多い町である。だが今日はそのせいばかりではなく強い空っ風も手伝っていることは、俗に小僧車こそうまと呼ばれる荷車を曳く丁稚達ていせが、鳥打帽ひさしの底を深く下げて眼を覆っていることでも明らかである。

大正七年の十一月に入ったばかりの昼下がりのことである。

その町を古びたトランクを片手に、残る片手で中折帽をおさえながら、からげた着物の裾の下から見せたもも引きの足を、いかにも疲れましと言わぬばかり

に引きずって歩いて来た四十歳位の男が、急に立ち止まると振り向きざまに「輪助わすけ」と呼んだが、途端に「危ない」と口走ったのは顔の前にこうもり傘の先が飛び込んで来たからである。それを辛うじてかわした男は

「輪助。そやさけこうもり傘はかついではならんと言うたじゃろが」

と叱ったが、叱る方が無理なのは輪助と呼ばれたのは子供も子供。恐らくそのこうもり傘より背も低く、その上痩せこけていて、この町に入ってから小さい風呂敷包みを通した傘を、かつぐのさえも重そうにふうふう言いながら前屈みになって懸命について来て、中折帽の男が急に足を停めたのも気付かず、思わずつのめって傘の先だけが前へ出てしまったくらいであったからである。

しかし、中折帽の男は項垂うなだれた少年がのっそりと肩の傘を手を持ち直すのを待ってから

「よいか輪助。このあたりが長者町と言うてのう。お前の奉公先のお店のある町じゃ」

輪助は砂塵でも入ったのか、しょぼつかせた眼で不安そうに通りを見た。

長者町——。

名古屋市に存するこの町は、徳川家康が名古屋城を築城した際に清洲の町から神社仏閣を始めとして町ぐるみ移動させた、いわゆる清洲越しの時の町の一つである。

家康は城の南部を平安京の都づくりをとり入れて碁盤割りの町にして、三之丸本町御門から本町筋を中心に武具や日用必需品を供給する商工地区と指定した。

長者町はその本町筋の一筋西側にあり、城にも近く藩御用達商人の多く住む一等地の町として栄え、当時は「ながもの町」と呼ばれていたが、明治維新後「ちようじゃ町」と改称された。

長者町は上、下長者町に分かれ維新以後は上長者町

は盛栄連なる芸妓連の置屋が軒を並べ遊興の町として栄え、下長者町は砂糖商や茶の仕入商の商人達で占められていたが、後には次第に他種卸商が店を連ねて行った。

男が言った輪助の奉公先もそんな下長者町に軒を並べた卸商の一軒らしく、輪助を従えて歩き出すとすぐに足を停めた。

「輪助。さああの店じゃ。あの看板を見ろ」

（洋物雜貨卸 丸幸商店）

恐らく少年では読める筈のない、漢字ばかりの屋根の看板を指さした途端に、男はよろけながら頭をおさえたのは、いきなりの突風に中折帽が吹き飛ばされたからであった。だが輪助の方は体ごと吹き飛ばされたらしく、路上には問題のこうもり傘だけが転がっているだけであった。

男は吹き飛ばされた中折帽を追いかけてやっと拾うと、帰って来て落ちているこうもり傘を見てから、輪

「どう……あい」

助の居ぬことに気付き

「おい輪助」と二、三度呼んだが、姿は見えず、突風で舞い上がった砂塵が漸く治まって来てから、つい二、三軒手前の問屋の店の前に置かれてある木箱の中から、ばたつかせている輪助の両足を発見した。

「あんなところに……」

男が溜息をつきながら近付いたのは、いくら突風とはいえ、あそこまで吹き飛ばされるひ弱い輪助が、この長者町の問屋で果たして丁稚小僧として勤まるだろうかと考えてであった。

「おい輪助。出んか」

あまり大きくもない反物の輸送用の木箱に、頭から突っ込んで自力で出ようとしてもしない輪助を見て、男はもう一度溜息をつくとその両足を持ち上げてやったが、上体は出ず箱と一緒に持ち上がっていた。

「輪助。箱を離せ」

これも男の注文が無理だったのは、あまり広く開か

れていない箱の蓋の内側に、輪助の腕が引っかかって外へ出られぬからであった。

それでもどうにか箱から引きずり出したが、額の擦り傷に触れながら泣きつ面の輪助を見ると、男はどうとう

「ええかいのう」

と溜息から吐息に変わっていたのは、こんな頼りがない子供を連れて来た自分の方が文句を言われることは火を見るより明らかであったからで、しかし、連れて来ざるを得ない事情がこの男にはあったのである。

この男は丸幸商店へ出入りする安森なる提灯屋ちようちんで、しかも訛からでは近江の商人、とならば得意の行商のついでに小僧捜しを命じられたのであろう。

それでも男は手拭いで輪助の額の傷をおさえ汚れを拭いてやると、格子構えの丸幸商店の戸口へ輪助を連れて入ったが、その途端に店内から

「どう……あい」

なる甲高い声がいつせいに飛んで来た。それを聞くと、や輪助ははじかれたように外へ逃げ出していたから、男はまたまた溜息をつきながら表へ出ねばならなかった。

「輪助何で逃げ出す……」

「怒鳴られた」

「怒鳴られたんではのうて、あのへどう……あい」と言うのはへどうぞお入り」ということじゃ。お前も小僧になれば言わにゃならん挨拶じゃぞ……。ただし無事雇われればの話じゃが」

そこで安森はまた溜息をつくともるで戦場に向かうがごとく今度は輪助の手をしっかりと握り再び戸口をくぐったが、もうその「どう……あい」が聞こえなかったのは、この男が「どうぞお入り」と迎える対象の客じゃないことを店の者が知ったからである。

「どうも、毎度……大將は……」

「奥に居りやあす」

番頭に頤^{あご}でしゃくられて愛想笑いを浮かべながら男は土間伝いに店を通り抜けると、茶の間では遅い昼飯を喰べていた中年の主人夫婦が箸をとめて男を見た。

主人は五十歳過ぎの白髪まじりの頭髮を丹念に刈り上げた、見るからに神経質そうな男で、妻女は小肥りながらも厳しい眼をした女であった。

「こりやあ旦那さまにごつさま。ご飯でございましたか。ではあちらで待たせていただきますで」

店へ戻ろうとする男を主人が呼びとめたのは男の背後に隠れるように立っていた輪助の存在にやっと気付いたからか

「提灯屋さん連れて来てくりやあしたか」

と身を乗り出すようにして輪助を見た。

「はい。やっと思つて参りました。しかも北も北。

北海道は小樽からでございます」

「北海道なら確かに北の方だわなも」

主人はうなずいてから

「どう……あい」

「その子の名前は」

「輪助。小山輪助と申しまして、歳は十三歳でございます」

すると、今まで黙っていたごつさまと呼ばれた妻女が

「十三……」と驚いてから

「提灯屋さん、うちは小学校出しか雇えんと……」

「いえその代わり別家は三十でも三十一でも結構で」

提灯屋は必死に頼みこんだ。

「それにこの子は北は北海道、しかも北の小樽。それも小樽でも北の方から見つけました子で、わしはこの子ならとびーんと感じました。というのもこれでなかなかはい、こいところもごわいまして」

「そう言やあすけど煮干のような子供だわなも」

どうやら妻女は輪助を気に入らぬ様子でちらりと主人を窺ったが、主人の方は淡々とした表情で

「両親は達者でおりやあすか」

と提灯屋に質問を続けていた。

「はい二人共揃うております」

「父親はどんな仕事を……」

「やん衆漁師でございます」

「そうするとやっぱ煮干だわなも」

妻女が又不機嫌な声を出す。

「それで何人兄弟で何番目の……」

「へえ。七人兄弟の四番目とかで……」

提灯屋はその間に思い出したのか急いで胴巻から封筒を取り出して

「これが親元の請状と身元引受証でして……」

と上がりがまに置いたが、近くに坐る妻女は手に取るうともせず

「旦那さま。こんな子供を本当にお使いになるつもりでいりやあすのかなも」

さも私は反対ですとばかりに主張するのに

「今年は北から来る小僧は店の役に立つという卦だそ

うでなも」

そんなやりとりを聞きながら輪助が変な顔をしたのは、珍しい名古屋言葉のせいではなく、さっきから着物の筒袖の中の右腕に何かが巻きついていているようで、気になって仕方がなかったからである。

輪助は提灯屋の体の後に回り、できるだけ体を隠しながら、袖の中へ左手を入れて探ると確かに右腕に柔らかな感触の何かが巻きついていていた。

輪助はそれを袖から引き出してからちらりと見て、慌てて押し戻したのは、明らかに女ものの薄桃色をした布地であったからである。

どうやらさっき突風に吹き飛ばされて、木箱に頭から突っこんだ時に知らぬ内に袖にのってしまった……。とは輪助にも判断はついたものの、それが半襟と呼ばれるものであることは子供の輪助にわかる筈はなかった。

(返しに行かないとならない)

輪助はどう言って返しに行こうか、この提灯屋に相談しようかと考えていると妻女が

「そう言やあその子はさっきからちょっと喋つとれせんがなも」

提灯屋は慌てて輪助を叱りつけた。

「これ輪助。旦那さまとごつさまにご挨拶せんか」

しかし袖の中の奇妙な布のことばかりに気を取られている輪助は、急に小突かれてもどきまぎして道中汽車の中で何度も教えられた「初めてお目にかかります。私は小山輪助と申します……」なる挨拶が出ず

「……お目にかかり……」

だけ言うのがやっとだったから妻女もここぞとばかりに

「提灯屋さん。こりやどこの言葉だなも」

又もや皮肉を浴びせられて思わず

「阿呆んだら。ちゃんと教えた通りに言わんけ」

と言わずもがなの叱り方をして、妻女からじろりと

「どう……あい」

睨まれて親念の目を閉じたが、その間黙って親元の請状を見ていた主人が

「北の北……」

と呟いてから怪訝そうな顔をする妻女に

「この子は北から来た北の子供。しかも輪助とは北の輪。輪は丸い、その上に七人兄弟の四人目はこれ又まん中。つまり北の北の輪の軸の子供……。提灯屋さん引き取りましたでなも」

と懷から財布を取り出しながら

「汽車賃は……」

と聞いたから提灯屋はほっと大きい息を吐いたが妻女の方は

「こんな小ぢやな子供なら背中に背負つとれば改札口は口ハで通れるがなも。のう提灯屋さん」

とせめてもの抵抗を見せていた。

「いえ。大人分はちゃんと払いましたので……」

「こんな子供に大人賃……」

ごつさまが疑惑の眼を向けるのに

「輪助ちゃんと払ったな」

と必死に証言を求め、辛うじて汽車賃を受け取った提灯屋は主人の気の変わらぬうちにと思つてか

「よいな輪助。ちゃんと上のお方の言うことをよう聞いてお店の為に役に立つように働くんやぞ」

とせかせかと言つてから

「それでは旦那さま、ごつさまどうぞよろしうにお願い致します」

頭を下げて帰ろうと一旦は踵を返したが思い出したらしく

「あの旦那さま。お約束の提灯のことでございますが……」

と言いかけるとすかさず妻女から

「こんなひでえ子供を連れて来て、まだその上に提灯まで買わせるとは……だで近江の商人は氣に喰わんのだわなも」

と
そう言われては何も言えず、絶（た）えるように主人を見る

「汽車賃も高（たか）ついたことだし、ちょこっと考えてから返事（へんじ）しよ」

とは。その上にある。

「提灯屋さん、この子の身元引受人の判だけについてまゐますな」

提灯屋は世にも渋い顔を見せると、ごつさまなる妻女からささず

「自分で引受人にもなれんぐらいのひでえ子かなも」と白い眼を向けられて

「いえ。つかせて頂きます」

困惑し切った顔で胸巻から判を取り出して、身元引受状の三人目にわが名を書き判を押そうとすると覗きこんだ妻女から

「ほう。他の引受人は北海道ばっか。こりゃ何ぞあつたらお前さんのとこへ連れて行くでなも」

提灯屋（ていとうや）せんぶりを飲んだような顔をしながら、判を押（お）し終わると

「それではちょっとこの子に言うて聞かすことがありますので、それから黙（もく）つて失礼（しつれい）致しますすで」

と輪助（りんすけ）を連れて台所から店へ僅（わずか）か出た土間で、輪助の両肩（りょうかた）に手をおいて覗きこむようにして

「ええのう輪助。わしは心ならずも身元引受人の判をついた。身元引受人というのはお前に何かしくじりがある度にわしが呼び出されては叱（な）られるということじゃ。しかしじゃ、わしが家にいる分には来て詫（わ）びてもやれるがの、わしは年中行商（ぎやうじやう）の旅に出とる。そしたらじゃ、あのごつさまの劍幕（けんまく）ならわしの帰りを待つとられんと、お前をわしの家へ連れて来て今日限り暇（ひま）を出すと言（い）いかねん。ところがわしんとこには五人の子供（こども）がいるし、その上にの、わしの嫁（よめ）はんときたらこのごつさまの比（ひ）やないきつい女（め）じゃ。お前にとつと出て行けと言（い）いよるぞ。お前一人（ひとり）で北海道へ帰（かえ）れるか、